

授業力向上に向けた研究組織の取り組み

－教科等横断的な授業づくりをめざして－

学籍番号 249124

氏 名 樋口 徹

主指導教員 佐々木 靖

副指導教員 坂本 俊哉

1. 序論

VUCAの時代と呼ばれる現代において、その時代を生き抜く児童生徒を育てていくためには、各教科の学びを基盤としながら、情報を統合し課題解決へと向かう資質・能力の育成が求められている。

実習校では例年、生徒指導事案が多く、その対応による教員の多忙化で、さらに、教材研究や研究授業が個人の負担に偏り、教科等横断的な学習指導が十分に浸透していないという課題がある。また、研究部が主催する研究授業・全体討議自体が、形骸化、義務化し、教員の主体的な学びにつながりにくいという課題も続いている。

この課題を解決するために、教員が元から持っているリソースを生かすことを優先し、効果的な対話ができる機会の確保と校内研修の充実から、授業力の向上と校内の研究部やA市の中学校教育研究会の取り組みを含めた研究組織の在り方を明らかにすることを目的とした。そこで本研究では、研究部主任という立場から、教科等横断的な授業づくりを軸とした指導案作成会、研究授業、全体討議を再設計し、その効果と課題を質的・量的データを用いて分析しようと計画した。

2. 実践1

従来の研究授業の課題を踏まえ、研究授業を「評価の場」から「学び合いの場」へ転換することを目的に、指導案検討会の構成と進め方を再設計した。まずは授業者にミドルリーダー層を含めること、指導案検討会の際には、教員を異教科・異年齢でグルーピングすること、そして各グループにファシリテーター役を設定することを研究部としての共通方針とした。指導案検討会では、自教科と他教科とのつながりに気づくことを重視し、各ファシリテーターが「話し合いの手引き」を用いて対話の質の保障を図った。

研究授業後に全教員にアンケート調査を行い、また、授業者である5名の教員に半構造化インタビューを実施した。その結果内容から、多くの教員が他教科の視点に触れることで自教科を相対化し、授業を多面的に捉え直す経験を得ていた。一方で、ファシリテーションの理解不足により、ねらいが十分に共有されないグループも見られ、研究部としての事前研修や目的共有の重要性が課題として明らかとなった。

3. 実践 2

実践 2 では、教科等横断的な視点を「無理に関連付けるもの」ではなく、「教科の本質を問い直す視点」として位置づけ直し、共通課題を軸とした授業作りを計画した。その共通課題は、例年実習校の課題として挙げられている「生徒指導」「人権教育」「仲間とのつながり」をもとに、多くの教員が日常的に関わる課題を出発点として、それらを軸に指導案作成会を実施する計画を立てた。指導案作成会を約1ヶ月の間に、合計 3 回実施した。各回の検討会を通して、教員は他者の専門性や経験に触れながら、また学校行事等と関連させながら、授業案をブラッシュアップしていく過程が重視された。

計 3 回の指導案作成会を経て、研究授業として実施した際の全体共有や、教員に対するアンケート結果からは、「考えを深める機会になった」「他教科の取り入れるべき点を精査したい」といった前向きな変化が確認された。また、作成会を重ねるごとにチーム内での発言のしやすさが高まり、安心して意見が述べられる雰囲気が形成されつつあることも明らかとなった。

一方、実習校の例年の課題である生徒指導対応に時間が取られることによる「時間的制約」や「現実的な実施の難しさ」を指摘する声もあった。

これらの結果から、教科等横断的な授業作りを継続して推進するためには、対話の場の確保と、教員の心理的安全性を支える組織的配慮の必要性が示唆された。

4. 総括

本研究の取り組みについての成果と今後の課題について考察した。成果としては、教員を異教科・異年齢でグルーピングし、対話の場を設定したことで、特定の指導技術や教材を導入することにとどまらず、自教科を見直し、他教科からの意見や視点から気づきを得て学び直すプロセスを経ることで、指導の幅が広がることがわかった。また、教員の教科等横断的な学習についての理解が深まり、共通課題を通して教科の本質や学習の価値を問い直す視点として機能することが明らかとなった。

また、指導案検討会や指導案作成会を通して、ファシリテーターが役割を果たすことで、教員同士が安心して意見を交わせる心理的安全性が向上することがわかった。一方で、個人で依存した実践には限界があり、研究部が目的の共有、質の良い対話の場の設計、役割の明確化を意図的に行う必要がある。今後は、教科等横断的な視点を学校文化として定着させるため、継続的かつ組織的な校内研修の構築が求められる。